

花の記憶

松浦のり子

花を 見ました

その年

雪の多かった冬

待ちわびた春は来ず

世界は 私から遠ざかった

見舞いの花々の 色は喪われ名も消えた

熱のない陽の光の その透明な闇の底で

私は 誰かに呼ばれた気がして

膝の上に置いた小さな棺から顔をあげた

流れ去る 車窓のぼんやりとした風景の中に

あ！

花！

花を 見ました

誰かの家の庭先に 満開の花を見ました

私は 花を見たのです

その 花の記憶は

深く深く私を降りていき

私のなかのもっとも低い場所で

決して消えない熾火のように

静かに 私を温め、私を励まし、私を奮い起たせるのです

あの日 花を見ました

私は

花を見たのです